

Influence of mandibular incisor agenesis and growth pattern on symphysis characteristics: A retrospective cephalometric study

吉田 早織

論文内容の要旨

下顎切歯の先天性欠如（先欠）や顎顔面形態および下顎結合部の形態は関連があると報告されている。従来、顎顔面形態と下顎切歯の先欠の2因子が下顎結合部の傾斜と形態に及ぼす影響を検討した論文はない。本研究の目的は、異なる顎顔面形態における下顎切歯の先欠と下顎結合部の傾斜と形態の関連を調べることである。対象は、下顎切歯の先欠を認める81名（欠如群）と先欠を認めない81名（非欠如群）であり、さらにそれぞれの群をFMAに従いHypodivergent(Hypo)群, Normodivergent (Normo) 群およびHyperdivergent (Hyper) 群に分類した。側面頭部エックス線規格写真を用いて、下顎骨結合部の傾斜と形態を評価するために角度計測5項目、距離計測5項目、面積計測3項目を測定した。そして、以下の結果を得た。

1. Normo 群においては、下顎切歯の先欠により下顎結合部の有意な舌側傾斜が認められた。
2. Hypo 群と Normo 群では、下顎切歯の先欠により歯槽骨の高径と幅径の有意な短縮が認められた。
3. 顎顔面形態にかかわらず、下顎切歯の先欠により歯槽骨の面積の有意な縮小が認められた。

以上より、日本人の歯科矯正患者では、下顎切歯の先欠が Normo 群において下顎結合部を有意に舌側傾斜させ、Hypo 群と Normo 群においては歯槽骨の高径、幅径および面積を有意に小さくすることが明らかとなった。

論文審査の結果の要旨

本研究は、異なる顎顔面形態における下顎切歯の先欠と下顎結合部の傾斜と形態の関連について検討したものである。日本人の歯科矯正患者では、下顎切歯の先欠が Normo 群において下顎結合部を有意に舌側傾斜させ、Hypo 群と Normo 群においては歯槽骨の高径、幅径および面積を有意に小さくすることが明らかとなった。これらの知見は、矯正歯科治療の診査診断と治療結果の向上の一助となる貴重な知見であり、歯学に寄与するところが多く、博士（歯学）の学位に値するものと審査する。

主査 小椋 一朗

副査 新海 航一

副査 影山 幾男

最終試験の結果の要旨

吉田 早織に対する最終試験は、主査 小椋 一朗 教授、副査 新海 航一 教授、副査 影山 幾男 教授によって、主論文に関する事項を中心として口頭試問が行われ、優秀な成績をもって合格した。